

島根県立石見美術館

研究紀要

第11号

2017

目 次

子どもの洋装化と消費空間 ----- 南目 美輝 1

森鷗外『うた日記』の挿絵画家・蘆原緑子について ----- 左近充 直美 14

子どもの洋装化と消費空間

南目 美輝

はじめに

平成27年度に当館で開催した「こどもとファッション—小さな人たちへのまなごしの歴史」展は、西洋と日本の近代の子ども服を基軸に、子どもの装いを描いた絵画等を展示し、それらを通して子ども向けられた眼差しのあり様を追いかける内容だった。日本の子どもの装いについては、明治期から着られ始めた洋服が、昭和初期にかけて普及がすすむ状況を紹介した。同展において、明治期の子どもの洋服そのものの展示は叶わなかったが、東京家政大学博物館所蔵渡辺学園裁縫雛形コレクションの裁縫雛形から、明治30年代に製作された子どもの洋服の雛形(図1、2)が出品された。この稀少な作例から、当時の子どもの洋服が目指していた方向性を推し量ることができよう。大正期の作例としては、男女の子どもの洋服の裁縫雛形が出品された(図3、4)。また、子どもの洋服そのものとしては、長野県須坂市にある田中本家博物館所蔵の大正中期から昭和初期の子ども服十数点(図5、6)と神戸ファッション美術館所蔵の昭和初期の作例数点(図7)が展示された。

それらを併せてみると、明治30年代後半(1900年代半ば)につくられた裁縫雛形にみる子どもの洋服と、大正中期以降(1920年頃)のそれとでは、製作年のひらきはわずか15年ほどだが、デザインが大きく変化していることがわかる。両者のデザインの大きな隔たりから、私たちは何を読み取ることができるだろうか。

装うことは、着る人のアイデンティティと密接にかかわる行為である。ゆえに、子どもの装いには、それ

を着せる大人の「子どもをどんな存在としてみせたいか」という子どもへの眼差し、すなわち子ども観が色濃く反映されている。ここで検討しようとしている明治から大正期にかけては、西洋の文化が受容されるなかで子どもへの眼差しが揺らぎ、見直された時期だった。前述の子どもの洋服や裁縫雛形は、子どもへの眼差しが変化するなかで、その装いについて試行錯誤がなされ、和装から洋装へと移行するその過渡期につくられている。さらにいえば、子どもの洋装化が本格的に普及し始めるのは大正中期以降といわれており、明治30年代後半から大正中期にかけての時期とは、その普及を準備した揺籃期といえる。

本稿では、この間の子どもの洋装化をめぐる状況について、裁縫の専門書における子ども服についての記述や、育児書などにみられる子どもにかんする言説を参照し整理を試みる。さらに、子どもの洋装というスタイルがどのように人々に受け入れられるようになったのか考えるため、まさにこの時期に台頭しつつあった百貨店という新しい消費の空間と、そうした空間の成立を準備した博覧会に注目し、そこで子どもや子ども服がどう扱われたのかみていきたい。そのなかで、先にみた子どもの洋服のデザインの差異がいかんにして生じたのか検討したい。

子ども向けられた眼差しと衣生活

明治期に入り、行政、経済、社会が急激に変化し、西洋の文化が流入する中、あらゆる習俗が見直され、時代に即したあり様について議論がなされ

た。なかでも衣生活は、機能面から洋装が推奨されると、和装から洋装へと移行する過程でさまざまな課題が見出され、それを改良しようとする動きがみられた。

まずは男性が、軍服や制服、仕事着、社交服で洋装をとり入れ、公の場における洋装が次第に定着していく。女性の場合、当初は一握りの上流階級が社交服として洋装をとり入れており、仕事着として洋装を採用したのは、看護師という職種に限られた。上流階級の女性がつりいれた洋装とは、同時代の西洋で着られていた、ウエストをコルセットで締め上げ、パッスルという下着で腰の後ろあたりを強調するというスタイルの、複雑な構造のドレスを模したもので、機能性の乏しい衣服だった。洋裁の技術が普及していなかった当時、仕立が容易でなかったことや、洋服の素材を輸入に頼っており生地そのものが高価だったことなどから、明治期を通して女性の洋装は普及せず、ケープや洋傘等洋装の小物を和装に組み合わせる和洋混合のスタイルが流行した²。

子どもの場合、洋装の普及は男性に続き、女性に先行したというのが定説である。では、洋装化をうながしたと考えられる、子どもへ向けられた眼差しの変化とは、どのようなものだったのだろうか。

富国強兵を掲げる新政府にとって、子どもは将来の国家を担うべき人材ととらえられた。そのことは、衛生学者三島通良³による以下の著作からもうかがえよう。三島は明治22(1889)年に著した育児論の冒頭に「国家富強の基は、人民の衛生に在」、また「衛生は婦人及び小児に対して、最も必要なり」と記し、子育てに衛生という視点を導入し、強い子どもを育てることが富国強兵の基礎となる、と説く。そして、母親の重要なつとめは子どもを強く活発に育てることであると主張する。強い子を育てるため、その衣服は、和服の場合軽くゆったり仕立てるとともに、さら

に手足が自由に動かせるような着装がのぞましいとし、洋装はそれが肩で衣服の重量を受けること、つまり腰への負担がすくないことから相応しい、としている⁴。さらに、子どもの活発な呼吸を妨げないよう、子どもの胸部、腹部を帯や紐などで強く締めてはならないとも述べている⁵。

このように当時の育児論では、強く健康な子どもを育てる事は富国強兵の考え方と結びついてとらえられており、そうした観点から子どもの衣生活の改善に取り組むべきとされた。和装の弊害が説かれるいっぽうで、衣生活の課題を克服するため衣服改良の動きが起こり、それは子どもの衣服についても及んだ。こうした動向にもかかわらず、明治期には子どもの洋装は都市の一部の階級にとどまり、その普及が本格化するのは大正中期以降となる。

明治期の洋裁技術の普及と裁縫教育

では実際のところ、明治期には、洋装の技術は一般にどの程度知られていたのだろうか。ここでは、高橋晴子による、近代に刊行された裁縫書等専門図書の解題を手がかりに、その状況を確認しよう⁶。

明治6(1873)年、洋裁技術についての最初の独立した書籍『改服裁縫秘伝』が刊行された。同書には男性の洋服についての仕立て方のみが載っている。その後明治20年までに裁縫書は15冊刊行されており、一年にほぼ1冊というペースで出版が続いた。明治19(1886)年の『小学生徒改良衣服裁縫伝授』に、裁縫書における改良服について初出と考えられる記述がある⁷。大人ではなく子どもの改良服がまずは紹介されたというのが興味深い。大人の衣服に比べ、子ども服の方が衣服改良という「実験」を試みやすい状況があったのだろうか。

続く明治20(1887)年から明治35(1902)年の15年間は33冊であるのに対して、明治36(1903)年から明治43(1910)年の7年間、つまり日露戦争前後の時期には52冊と裁縫書の刊行が急増しており⁸、洋裁が注目された当時の状況がみてとれる。明治41(1908)年刊行の裁縫書『洋裁宝典』の序文には、日露戦争の後に洋服の着用が盛んになり、その需要が著しく増加したこと、それにともない洋裁を学ぼうとする人々が増大した、と記されている⁹。明治30年代半ばには教員採用試験に洋裁が加えられており¹⁰、女子教育において洋裁を重視する傾向が強まったことも、裁縫書の需要が高まった一因と考えられる。

ここでようやく、私たちは冒頭で触れた東京家政大学博物館所蔵の裁縫雛形に戻ることができる。同館所蔵の図1、2の子どもの洋服の雛形は、洋裁に多くの人が関心をもったまさにその時期に製作された。同館の子どもの洋服の雛形を分析した三友晶子らによる先行研究によると、明治38年頃から洋裁のレベルが飛躍的に向上したという。このことは、直接には和洋裁縫伝習所(現在の東京家政大学)の創始者の長男で、裁縫教育者として主導的立場にあった渡邊滋が米国留学から戻り、最新の洋裁技術を教授した成果ととらえられている¹¹。当時の洋裁ブームともいえるような状況もまた、同校に学ぶ学生を大いに刺激したと想像される。なお、同校の裁縫雛形には明治30年と年記のある作例があり、洋裁が注目される前から雛形を用いた子どもの洋服製作が教えられていたことが明らかになっている¹²。その教育の先見性がうかがえよう。

明治41(1908)年には、子どもの洋服についての独立した裁縫書が初めて、しかも三冊刊行された¹³。このことから、子どもの洋服が人々に受け入れられはじめ、裁縫書についても専門家に限られていたかもしれないが、一定の需要が生まれていたことが

推測できる。明治41年前後は、子どもの洋装化をたどる上で注目すべき時期といえよう。

ただし、以下の点に留意する必要がある。婦人雑誌『婦人画報』について、明治から昭和初期の記事にみられる子どもの洋装化について分析した永野泉によると、明治38(1905)年から大正7(1918)年までは子ども服の仕立て方の記事は掲載されていないという。同誌がターゲットとしたのは、都市部の新興中間層の女性たち、つまりこの時期に子どもの洋装化を進めるのに中心となった階層の人々である。このことから、子どもの洋服を家庭で仕立てることは普及していなかったと考えられている¹⁴。この時期の子どもの洋服は、既製服か、専門家による仕立てというのが一般的であったようである。

明治末期の子ども服のデザイン

では、この時期の子どもの洋服が目指していた方向性はなんだったのか。そして実際はどのような洋服が着られたのだろうか。明治41(1908)年『最新流行小児洋服全書』[緒言]には、子どもの洋服について以下のように述べられている¹⁵。

今や洋服は第二の日本服となつて、現社會のあらゆる階級に歓迎されて居る、従つて又小児服の需要も近来非常に増加して来たのは、是又自然の趨勢である、けれども此小児服の流行が、日尚を淺き為め、之れを營業とする者を初め、一般の家庭に在ても、未だそれが裁縫上に於ける、智識を持つて居らぬ、従つて又如何なる形が衛生上經濟上將た美術上から見て完全にして流行に副ふて居るかと云う事が分つて居ない……

子どもの洋装は流行して間もないという現状把握とともに、それゆえ服の形は、衛生面や経済性、美的な観点から、いかに流行と合致しているかが重要であるのにそのことが理解されていない、という見解が示されている。ここから、少なくともこの時点で本書の著作者側には服の形は流行に関わりが深いという認識があることがわかる。ここで注目すべきは、子どもの衣生活をめぐるこれまでの言説で課題として挙げられていた「衛生」「経済」に、「美術」という視点が加えられていること、また服の形、つまり服のデザインが、上記の3点に留意した上で流行に合致しているかどうかが重要と指摘している点である。

デザインという視点で、明治38年に製作された2点の雛形を検討すると、図1は、高めに設定されたウエスト位置や比較的ゆったりした袖と絞った袖口、袴を思わせるような襷が入れたスカートといった特徴から、図2の雛形と比べると「より和裁に近い方法で製作されたように見える」という指摘がなされている¹⁶。さらにいうならば、本品は、当時の女性の和服を基本にしてつくられた改良服を想起させ、女性の改良服を縮小した女児の改良服であるような印象すら与える。いっぽう図2の雛形は、ワンピース型で、つまんだ首もとやそこにあしらわれたフリル、前身頃に寄せられたギャザー、袖や裾に用いられたレースなど全体に装飾的傾向がみられ、着丈は図1と比べ短いのが特徴である。図1と比較すると、より「洋服」らしいデザインになっている。実際、こうした子ども服は、西洋では19世紀末頃から1910年頃に女児服のひとつのスタイルとして流行している。

以上二つの雛形を比較したところ、明治38年という時点で、子どもの洋服として裁縫雛形を用いて教えられていたスタイルとして、和服よりのデザインと西洋の子ども服を模したものと異なった方向性がみいだせ、デザインに「幅」があったことが確認できた。この

時点では、子ども服が目指す方向は一つに定まっていたわけではなく、模索されていたことがうかがえる。

ではこの当時、裁縫の専門書では、どのようなデザインの子ども服が紹介されていたのだろうか。

明治41年に立て続けに刊行された子ども服関連の三冊を参照すると、山田や松江の著作では男児用セーラー服(図8)、ワンピース型の女児服(図9)、洋式涎掛、洋式前掛などが紹介されている¹⁷。図8、9は、イラストに稚拙さがみられるものの、いずれも洋服として違和感のないデザインである。東京洋裁研究所編の裁縫書は、挿絵として西洋のファッション雑誌等からとったと思われるイラストをそのまま転載していた¹⁸。

他方、いわゆる改良服はどのように扱われていたのだろうか。明治35(1902)年の山根正次『改良服図説』「西洋衣服の弊害の事」の項に、洋服は仕立てが困難であること、日本の気候にあわないこと、洋服用の生地を国外から取り寄せる必要があり不経済であることから、国民全体の洋装化は不可能であり、「今一層洋服より便利の(原文ママ)着物を拵えて用いた方がよろしいと思ひます」とある。具体的な提案としては、男女とも上着は同じ形で、女性の場合袴を、男性の場合は半ズボンを着用する。上着は筒袖となっており、袖口はシャツのように絞られている。男女ともに和服を基本に考案されていると思われる(図10、11)。さらに山根はこの改良服の着用は「先ず小児から始まるがよろしい」と説く。そして、子どもにとっては、外形や体裁などより、まずは身体を十分に発育させて学校で十分に知識を得ることが重要であるから、一日も早く改良服を着せるべきである、と強い調子で続けている¹⁹。この山根の著作が刊行された翌年、明治36(1903)年には渡邊辰五郎『婦人改良服裁縫指南』が出版されている²⁰。このことから、医学博士である山根や、渡邊のような裁縫教育にお

いて主導的な立場にいた専門家たちにとって、「改良服」とは、この時点で取り組むべきテーマとして捉えられていた。しかしこうした動きにもかかわらず、結局改良服は普及しなかった。そのことについては、後ほど触れたい。

ここで再び裁縫雛形に戻ろう。子ども服の裁縫雛形についての先行研究によれば、明治41年には「今日の我々から見ると洋服として違和感をおぼえるような服は製作されなく」なったという²¹。大正期にはいると、冒頭でふれた子どもの洋服の裁縫雛形(図3、4)や、男女児の洋服(図5、6)のような、現代においても違和感のない子どもの洋服の着用が主流となっていく。大正期のある時点で「洋服として違和感をおぼえる」服は見られなくなったようである。

子ども服に限らずあらゆるモノのスタイルについて、ある一定の傾向が主流となるには、そうした傾向が流行として多くの人に伝わり、共有されることが前提となる。以下では、服をはじめとするあらゆるモノの流行が人々に伝わる「場」として機能した百貨店の台頭と、それを準備した明治前期の状況を整理したい。なかでも子ども服に注目し、流行がうまれる「場」でそれがどのように扱われたのかみていこう。

博覧会がもたらしたもの

近代社会で、流行という現象が、多くのモノを通して人々に示される場として、大きな影響力を持ったのは百貨店である。百貨店という場については、既に数多く論じられ、多数の先行研究がある²²。ここでは、そうした研究を手がかりに、この近代の消費文化を象徴する場としての百貨店について考えていこう。

その前に、明治前期から開催された国家主導の

大規模な博覧会について触れておく。なぜなら、まずはこの博覧会こそ、大量かつ、さまざまな種類のモノを並べて見せるという体験を、多くの人に初めて提供した場であり、その意味において百貨店の先駆と見なされるからである。

新しい政府主導のもと開催された内国勸業博覧会は、文明開化や殖産興業を目的に、明治10(1877)年に第一回の博覧会が開催され、明治14(1881)年、明治23(1890)年、明治28(1895)年と継続し、明治36(1903)年まで5回開催された。国内から集められた出品物を一堂に展示したこの博覧会では、新しい「文明」とは何かを示し大衆を教化することが目指された²³。第一回は45万人を集め、回を重ねるごとに動員数は増えていき、明治36(1903)年の第五回内国博では435万人もの入場者があったという。さらに驚くべきは、その出品者数の多さである。第一回内国博は1万6千人、第二回は2万8千人と増え続け、第五回は12万人にも上っている。まさに国をあげてのイベントで、膨大な数のモノがあつめられた展示をいちどきに見るといふ体験をした多くの人々は、この場でなにを感じたのだろうか。吉見俊哉は、「テレビはもちろん、百貨店も雑誌広告も未発達だったこの時代、人々はまず博覧会場へと出かけていくことで、資本主義が提供しつつあった溢れんばかりの『豊かさ』のイメージに圧倒されていったのだ」として、内国博という、登場したばかりの「新しい『眼』の空間」を、明治前期の大衆がどう受けとめたのか叙述している²⁴。多くの人が博覧会に出かけることで、会場の中を歩きつつ膨大な数のモノに圧倒されつつも、モノを見比べ、また新しいモノを見出す楽しみを知ることになった。この「新しい『眼』の空間」での経験が、当時の人々の感覚や認識にもたらした変化は、明治以降の消費社会や流行という現象を考えるうえで無視できないだろう。

娯楽化する博覧会

さて、この内国勸業博覧会であるが、すでにみたように本来産業振興を目的に開催されたものであり、当初より近代以前の見世物的傾向の強い事物は排除されるべきものとして企画されていた。しかし明治30年代以降に開催された内国博覧会では、娯楽性や見世物的傾向が強まっていったことが指摘されている。

大阪で開催され680万人余りを集めた明治36年の第五回内国博覧会では、メリーゴーランド、ウォーターシュートといった遊戯施設が置かれるなど、大衆をひきつける娯楽的要素が取り入れられた。

その4年後、明治40(1907)年に東京上野で開催された東京勸業博覧会では、そうした傾向はさらに強まった。会場となった上野公園はどのような様子だったのだろうか。会場図面には、第二会場となった不忍池付近の様子が詳細に記録されている²⁵。不忍池にはウォーターシュートが設置され、池の周辺には売店がびっしりと立ち並んでいる。売店ではあらゆるものが扱われた。茶屋、だんご屋、せんべい屋に加え、アイスクリーム屋やライスカレー屋、ミルクケーキを扱う店もみえる。玩具屋、絵ハガキ屋、陶器店、また服飾関係の店舗としては、宝飾品、緋、浴衣、かんざし、ハンカチ、シャツ、リボン、袋物の店、そして婦人服や子供服を販売していた「大河内商店」も出店していたことがわかる。

同博覧会ではまた、膨大な数の展示品を収めるのに、いくつもの展示会場が用意され、その展示会場の間には、数多くの飲食店などが配置された。同博覧会には観覧車も設置され、また夜間は展示館の外壁がイルミネーションで美しく彩られたという。この東京勸業博覧会を訪れた多くの人にとって、博覧会という「新しい『眼』の空間」は娯楽と結びついた「場」と

して改めて認知されていくようになったと考えられる。

博覧会に出品された子どもの洋服

他方、東京勸業博覧会の展示であるが、1万7千人もの出品者からの集められた膨大なモノが、「教育」や「農林水産業」、「工業」、「染織」、「美術」などに分類され、領域毎にまとめて陳列された。

同博覧会には子どもの洋服も出品された。『東京勸業博覧会実記』掲載の出品目録では、子ども服の出品について以下の記載がある。

実用新案小児用衛生防水シャツ 他五点 松下喜平
モスリン小児服 他六点 関根孝助
小児前掛 重本泰五郎
ガールズドレス(少女服) 他14点 村田作次郎

『東京婦人子供服業界三十年史』によると、子どもの洋服を扱っていた大河内商店が「体操服・夜会服・子ども服」の既製服を同博覧会に出品したという²⁶。この出品目録には「大河内治郎」出品として以下の記載があるのみである。

イブニングズ(原文ママ)レッシェ但夜会服 他2点
大河内治郎

本出品目録より「大河内」が博覧会に子ども服を出品したかどうか明らかにならなかったものの、同業他社による子どもの洋服の出品は複数あったことが確認された。博覧会という桁外れの動員を誇った催しに、子どもの洋服が婦人の洋服などとともに出品されたという事実は、その業界にとって意義深いことであつたと想像される。

博覧会の変質と子ども博覧会の開催

明治40年前後に、博覧会には「子ども」という観点から見逃せない変化が起こった。産業振興を掲げ、幅広いジャンルの品を展示していた博覧会だったが、扱われる領域が絞られるようになり、またそれも「家庭」や「婦人」「子ども」と身近な内容へと変わっていったのである。主催者も、政府から新聞社や百貨店という企業へ移行していく。

このような生活に密着したテーマを扱った博覧会としては、明治39(1906)年、上野で開催された同文館主催の「こども博覧会」が嚆矢とされる。ここでは、図書や絵画、文具類、衣服調度品、教育に関わる機器類、玩具という教育や生活にかかわる品々とともに、子ども自身による製作物なども展示された²⁷。つづいて明治42(1909)年には、三越が百貨店として初めて「児童博覧会」を開催した。開催趣旨と展示内容について以下のとおり説明されている。

……衣服、調度及び娯楽器具類を古今東西に亘りて、洽く鳩集し、又特殊の新製品をも募りて、之を公衆の前に展覽し、以て明治今日の新家庭中に清新の趣を添えんことを期するにあり。……²⁸

実際のところ、子どものための「衣服、調度及び娯楽器具類」のみが展示され、明治39年の「こども博」に出品されていたような子ども自身が製作した品々は展示されなかった。このことは、同博覧会に審査委員として参加した菅原教造が「……生産よりも消費の奨励と云う風になり、品物の捌け口を見出す事、即ち販路の拡張と云う事を主として見るやうになつた」²⁹と記したとおり、博覧会のあり方が以前とは変わってきていることを示している。つまり、この「児童博覧会」を企画した三越は、展覧会の来場者を生

産者としてではなく消費者として位置づけ、博覧会の場を販路拡大のひとつの手段とみなしていたのである。この頃から博覧会は「生産の場というより、むしろ消費の場に対してのモデル的な役割を果たしていく」³⁰ものへと変化していった。

付け加えれば、三越は、高島屋、白木屋、伊勢丹などの百貨店とともに、三越主催の児童博の前年に開催された東京勸業博覧会にも出品している。博覧会への、百貨店の出品が盛んになったこともまた、「消費の場に対してのモデル」となりつつあった明治後期の博覧会の変容を象徴的に示しているといえよう。

前述のとおり、明治40年頃には、博覧会でさまざまな展示物を見て歩き、会場でアトラクションなどを楽しむという体験が普及していくわけだが、大規模な博覧会が開催されなくなると、替わって台頭した百貨店が、商品を売るだけではなく、そうしたエンターテインメントの場としても整備されていく。百貨店側も、博覧会を引き継ぐ自らの役割に自覚的であったことは、三越が子ども向けの用品を研究するために設立した「児童用品研究会」の幹事の一人であった菅原教造が、博覧会と百貨店の関係について述べた以下の文章からも読み取れよう。「……近世の小売営業法で最も新しく、最も進歩して居るデパートストアの制度の型は、実は博覧会のやり方に過ぎないのである。」³¹

「子ども」という市場の発見

三越は、明治41(1908)年に子ども用品部門「子供部」を設置し、子ども向け商品の開発などに積極的に取り組むようになった。それは三越が、新たに「子ども」という拡大の見込みのある市場を見出した

からである。「子供部」設置の翌年には第一回児童博覧会を開催、以降大正3年まで毎年児童博を開催した。こうした活動により、百貨店の子ども用品部門は急速に発展をとげる。この時期の百貨店が扱った子どもの商品デザインについては、神野由紀による充実した研究がある³²。神野によれば、「明治末から大正初期にかけて、市場における『子ども商品』の爆発的增加がおこって」いた。なかでも子どもの既製服を「『売れる商品』あるいは『将来の子ども市場に向けてのデモンストレーションを兼ねた、見える商品』として大量に販売し始めたことは重要である」と指摘している³³。

子どもの洋服の既製服が、その重要な商品のひとつであったことは、先にふれた三越による第一回児童博覧会の開催趣旨に、「衣服、調度及び娯楽器具類」と、まずは「衣服」が挙げられていることから察せられる。また、本稿の冒頭でふれた「こどもとファッション」展に出品された大正中期以降の子どもの洋服には、「三越」「松屋」「松坂屋」のラベルがつけられたものが多数含まれており、百貨店で子どもの洋服の既製服が扱われていたことがわかる³⁴。そうした子どもの洋服は、当時数多くの商品とともに、多彩な演出と娯楽施設を整備し多くの人を惹き付けていた百貨店に陳列された。子どもの洋服は、他の子ども向け商品とともに、訪れる人々に「新しい家庭生活のイメージ」を想像させ、それを手にする事でそうした「新しい家庭生活」に近づくことができると思わせた。この目指されるべき「新しい家庭」の子どもに相応しい衣服は、和服ではなくやはり洋服であった。この子どもの洋服は、新しい「子どもらしさ」のイメージとむすびつけられ、百貨店をはじめとする消費空間でさかんにプロモートされたのである。

改良服の「限界」 むすびにかえて

最後に改良服について触れておきたい。明治初期から衣服の改良は課題とされており、その後長らくさまざまな改良服が提案された。しかし、改良服という実験的な装いは、流行の先端となることなく終わる。その理由について考えるのに、子ども服のスタイルがほぼ定まったとされる大正中期、大正8(1919)年に発表された以下の文章を参照しよう。

……然るに、何故かうした改良服が、實際、我々の日常生活上に使用されないものであらうか。従來の衣服は、我々の生活上、經濟上に多大な不便、不自由を感じて、その改良を叫びつゝあるが、それは唯、一部の人にのみ限られて、大多數の國民は、殊に、日常それと、最も關係深き婦人にして、不關焉とをさまりかへつて居る。我々は、總て新らしき事物に對して慾望が起る、然し乍ら又半面に於て、古いものに對して、深い執着を感ずる。……今迄の改良服なるものは、不完全なのが多い。經濟と活動といふ點はいいが、美といふ事がなかつたり、實際に使用しようとなると、面倒であつたりする。……³⁵

ここで改良服が経済的かつ機能的である点は評価するものの「不完全」で「美といふ事がな」いから使用されない、とそれが着られない理由をあげている。ではここでいう「美といふ事」とは、なにを指すのだろうか。

この文章が発表された大正中期、先述のとおり、百貨店という場は、人々に商品を通じて「流行」を示す重要な文化装置として機能していた。この華やかに飾られた消費空間で、人々は数多くの商品を見ることに慣れていった。そして、商品を見るという経験

を積み重ねることで、人々は何を美しいと感じ、また何を欲しがるのが「正しい」のか学んだのではないだろうか。

子どもの装いについていえば、子どもの洋服として百貨店で扱われたものと、大正期に提案された和服を基本とした改良服のデザインとは隔たりがあった。改良服のデザインはやはり、当時「洋服として違和感がある」ものだったのだろう。同様に、本稿の冒頭でふれた裁縫雛形のうち、「洋服としては違和感のある」子どもの洋服は、子どもの洋服の「正しい」あり方が、博覧会、百貨店などの消費空間を通してさかんにプロモートされるなかで、おそらく当時の人にとっても「違和感のある」ものと感じられたと想像される。そうした「違和感」が、先にみた「美といふ事がない」というコメントにつながっていったのではないか。ゆえに洋服として「違和感のある」形の裁縫雛形は、少し時代が下ると製作されなくなったのではないだろうか。

結局のところ、子どもの洋服として主流となったのは図5、6にみるようなすっきりとしたデザインのものであった。大正中期に確立したこの子ども服の傾向は、「子どもらしい」服のひとつの型として定着していく。本稿では、大正中期以降、子ども服とむすびつけられた新しい「子どもらしさ」そして「新しい家庭生活」とはどのようなものであったのか、その分析にまで及ばなかった。今後の研究課題としたい。

(当館学芸課長)

註

- 1 裁縫雛形とは、明治から昭和期に、裁縫学校等の授業で製作された衣服や生活用品のミニチュアのこと。雛形の製作は、小さく作ることで布地が節約でき、短期間で多種多様な衣服の作り方を学ぶことが出来るとして、画期的な裁縫教授法のひとつと言われた。
- 2 能澤慧子「第7章 洋装化の時代」増田美子『日本服飾史』東京堂出版、2013年
- 3 三島通良は、明治期末には当時の有力百貨店として台頭した三越とも関わりをもった。三越主催の児童博覧会の企画者たちが参画した児童用品研究会に、幹事として参加している。
- 4 ここで興味深いのは、三島が子どもの洋服について、腰をしめつけるのではなく、肩を支点とした構造をもつとらえている、という点である。実際、1880年代の西洋では、ウエストをしぼらない、ゆったりとしたスタイルの女兒服が普及していた。この時点で渡欧経験のなかった三島は、輸入された西洋の子ども服などを参照し、西洋の女性服とは全く異なる構造をもつ子ども服の特徴について言及したのかもしれない。
- 5 三島通良『ははのつとめ』子の巻、丸善、1889年
- 6 高橋晴子『近代日本の身装文化 「身体と装い」の文化変容』三元社、2005年
- 7 高橋、前掲書、p.131
- 8 高橋、前掲書、p.136
- 9 大見文太郎『洋裁宝典』第一巻、第日本洋裁普及学会、1908年
- 10 明治34年の教員採用試験には「女兒洋服上着一枚 仕立方」が、翌年には「男児（四、五歳）水平形洋服上着」の製作が出題された。（渡邊辰五郎『婦人改良服裁縫指南』東京裁縫女学校同窓会、1903年）
- 11 三友晶子、太田八重美編「重要有形民俗文化財指定10周年記念 渡辺学園 裁縫雛形コレクション」展図録、東京家政大学博物館、2010年、p.17
- 12 三友晶子「裁縫雛形にみる子供服の洋装化の過程」『東京家政大学博物館紀要』第14集、東京家政大学博物館、2009年
- 13 東京洋裁研究所編『最新流行小児洋服全書』東京洋裁研究会、1908年
松江みさ子『子供西洋服の拵えかた』服部書店、1908年
山田東明『男女児洋服裁縫書』文錦堂、1908年
- 14 永野泉「『婦人画報』にみる子供服の洋装化の過程」『服飾文化学会誌』〈論文編〉第8巻第1号、服飾文化学会、2007年
- 15 東京洋裁研究所編、前掲書
- 16 三友、前掲書、p.173

- 17 山田、前掲書、及び松江、前掲書
- 18 東京洋裁研究所編、前掲書
- 19 山根政次『改良服図説』伴鶴堂、1902年
- 20 渡邊辰五郎『婦人改良服裁縫指南』東京裁縫女学校同窓会、1903年
- 21 三友、前掲書、p.174
- 22 初田亨『百貨店の誕生』三省堂、1993年
山本武利、西沢保『百貨店の文化史-日本の消費革命-』世界思想社、1999年
神野由紀『趣味の誕生-百貨店がつくったテイスト』勁草書房、1994年
神野由紀『百貨店で〈趣味〉を買う 大衆消費文化の近代』吉川弘文館、2015年 他
- 23 吉見俊哉『博覧会の政治学』中公新書、1992年、pp.122-130
- 24 吉見俊哉『視覚都市の地政学-まなざしとしての近代-』岩波書店、2016年、pp.118-119
- 25 高木栄吉、清宮秀乃助編「第二会場 実地調査 売店明細図」『東京勸業博覧会実記』重宝新聞社、1907年
- 26 東京婦人子供服業界沿革史編纂委員会編『東京婦人子供服業界三十年史』(東京婦人子供服製造卸協同組合、1960年)29頁に、子ども服が初めて博覧会に出品されたのは、「明治四十年、東京上野で開催せられた第五回勸業博覧会」との記載がある。しかし、第五回内国博開催は明治36(1903)年であり、ここでいう「第五回勸業博覧会」というのは東京勸業博覧会を指すのではないかと思われる。
- 27 是澤優子「明治期における児童博覧会について(1)」『東京家政大学研究紀要第35集(1)』、1995年、pp.159-165
- 28 武田櫻桃「児童博覧会開設の由来」『みつこしタイムス』臨時増刊第7巻第8号、1909年、p.7
- 29 菅原教造「児童博覧会感想」『みつこしタイムス』臨時増刊第7巻第8号、1909年、p.137
- 30 吉見、前掲書、1992年、pp.152-158
- 31 菅原、前掲書、p.142
- 32 神野由紀『子どもをめぐるデザインと近代-拡大する商品世界』世界思想社、2011年
- 33 神野、前掲書、p.136
- 34 『こどもとファッション』展図録、鳥根県立石見美術館・神戸ファッション美術館・東京都庭園美術館・読売新聞社・美術館連絡協議会、2017年、pp.103-110
- 35 原田つじ「各種改良服が実際に使用せられる原因」『裁縫雑誌』16(3月号)東京裁縫女学校出版部、1919年、pp.41-42



図1
裁縫雛形 子供洋服
明治38(1905)年
東京家政大学博物館



図2
裁縫雛形 女簡單服
明治38(1905)年
東京家政大学博物館



図3
裁縫雛形 女簡單服
大正9(1920)年
東京家政大学博物館



図4
裁縫雛形 男簡單服
大正9(1920)年
東京家政大学博物館



図5
男児用ベルト付スーツ
大正11(1922)年頃
田中本家博物館



図6
女兒用ワンピースドレス
大正11(1922)年頃
田中本家博物館



図7
「女児用ワンピースドレス」
昭和初期
神戸ファッション美術館



図8
「水兵服」(男児用) 山田東明『男
女児洋服裁縫書』、1908年より



図9
「ヨーク、ドレス、ペチコート附
(乙)」 山田東明『男女児洋服裁
縫書』、1908年より



図10
「婦人改良服扮装の図」
山根正次『改良服図説』、
1902年より

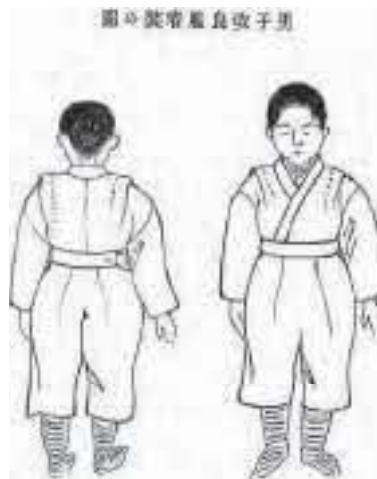


図11
「男児改良服着装的図」
山根正次『改良服図説』、
1902年より